

NEWSLETTER #98

関西地区例会報告

p.1 2013年第2回例会
研究会「音楽フェスのジレンマ——慈善事業かビジネスか？
ローカルかグローバルか？」……………吹上裕樹／岡田正樹

p.3 会員の OUTPUT

Information

p.3 事務局より

2013年第2回関西地区例会報告 吹上裕樹／岡田正樹

研究会「音楽フェスのジレンマ——慈善事業かビジネスか？ ローカルかグローバルか？」

日時：9月28日(土)15:00～18:00

於：関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス

沖島了太(舞音楽祭主催者・財団法人 O-Plus 代表理事・非会員)

山本佳奈子(アジア・インディーカルチャーサイト Offshore 主宰・非会員)

永井純一(神戸山手大学)

司会：長崎励朗(京都文教大学)

第2回関西地区例会は、音楽フェスをテーマとした研究会として、2013年度のJASPM年次大会会場でもある関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス内で開催された。

研究会は沖島了太氏による「クラブ人脈が動かすフェス」と題した報告からスタートした。

沖島氏は財団法人O-Plus代表理事として舞音楽祭(旧渚音楽祭)等のイベントを主催している。またAMF(Asia Music Festival)ブランドを用い、中国やフィリピン等の日本以外のアジア地域でもクラブ系の音楽イベントを開催している。更に音楽外の活動として、大阪・アメリカ村や震災後の岩手・陸前高田でのボランティアもやっている。

報告では、音楽イベントを主催する目的や利点、AMFブランドを用いる理由、FUJI ROCKに関わっているPA東雅之氏から受けた指摘、舞音楽祭の作り方、ボランティア活動等についての説明が行われた。

音楽イベント実施の全体的な目的は、人々の交流やアジア圏の友好を促すことであるという。そうした音楽イベントを作る際に重要であるのが、各ブースを担当するオーガナイザーのモチベーションをいかにあげるかということや、ゴミ処理のボランティアを多く集め、ノウハウを獲得してもらうこと等であると述べた。

音楽外のボランティア活動は、こうした音楽フェス運営の実務的な側面にも好影響を与えているようである。例えばアメ村のゴミ拾いは風営法適用の厳格化に対する健全化アピールの側面があるが、ボランティアがゴミ分別のノウハウを蓄積することに繋がり、会場を借りる際に清掃活動の実績が有利に働くといった利点もあったとのことである。

これら0-Plusの様々な活動は全てクラブ人脈に支えられているという。そのクラブ人脈の強みとして沖島氏は、「名刺などで始まるフォーマルな付き合いではなく、好きな音楽を共通項にした感情的なつながり」である点を挙げた。とりわけボランティアにとっては感情的なつながりが重要であり、クラブはこのつながりの源泉であるとして報告を終えた。

報告後は登壇者3者と司会者によるクロストークへと移った。話題となったのは音楽フェスや音楽シーンの現状、フェスごとの性格・アイデンティティの問題、そしてフェスにおけるローカル／グローバルをめぐる諸問題等である。

沖島氏はクラブ・シーンでの現在の流行に関する話題の中で、フェス主催側としては確実に人を集めるであろうミュージシャンを安易に呼ぶことへの抵抗があると語った。フェス研究の永井純一氏は、このそれぞれのフェスの色と出演アーティストの関係も一種のジレンマであると指摘した。アジアのアート・カルチャーを紹介するウェブマガジンOffshoreの主宰である山本佳奈子氏は、ミュージシャンを紹介する立場からフェスの性格と出演アーティストの関係についてのエピソードを述べた。山本氏はタイのインディー・バンドを日本に呼んだ際に、そのバンドをサマーソニックに出さないかという話を持ちかけられたが断ったという。既に人気を獲得している欧米の大物バンド達を前にして、アジア圏で括られたステージでの演奏がしっかりと観客に届かないという例を見てきたことが大きいとのことであった。こうした事例も絡めて、日本の海外に対する視線やアジアから見た

時の日本に関してのやりとりも展開されていった。また永井氏からのアジアの音楽シーンの現状についての質問に対して沖島氏と山本氏が答える形で、日本の抱くアジアのイメージと実情とのずれ等が議論され、前半部は終了した。

休憩をはさんだ後半部では、フロアからの問題提起や質問を中心に引き続き議論が進められた。まず、フロアからの提案を受けるかたちで、永井氏により、音楽フェス研究において先行している海外での研究動向がまとめられた。それによると、海外でも90年代以降にフェスティバルやイベントが増加しており、それを「フェスティバル現象」と呼ぶ研究者もいる。また、研究方法についても多岐にわたっており、そのなかには歴史研究、オーディエンス研究、運営方法をめぐる研究、ツーリズム研究、教育・医療関係の研究までが含まれるという。永井氏は、フェスティバル現象そのものが日本では海外よりも遅れて到来しているため、今回紹介したような海外における研究等を参考に、今後の日本におけるフェス研究を行ってゆくのがよいのではないかと述べた。

つづいて議論になったのは、研究会のテーマにも掲げられた「慈善事業かビジネスか？」というジレンマをめぐるものであった。音楽イベントは、人々が利己的な関心をもって集まり一体感を得ることを目的とするところであると考ええると、慈善事業という言葉はそもそもここには当てはまらないのではないかと。こうしたフロアからの問いかけに対して沖島氏は、イベントはボランティアとしてやっているわけではなく、もちろん黒字になるほうがよいと答える。一方で、考えられているほどイベントによって多く利益がでるわけではなく、ただ儲けのためにやっているというのも違うという。被災地でのボランティアを行うのも、自分たちがやっていて気持ちがいいというものもあるが、やはりよろこばれるからなのだと語る。ほかにも沖島氏は、イベントによる地域経済への波及効果や、イベントを主催することでスポンサー企業の重

役と学歴等に関係なく対等に話せるという利点についても言及した。こうした沖島氏の語りからは、「慈善事業かビジネスか?」という二項図式では割り切れない、いくつもの動機から事業を行っていることがうかがわれた。

こうした議論に対して山本氏は、そもそもアーティストも音楽だけで食べていけないと述べる。それほど名の知られていないアーティストであれば、自分で飛行機代を出してでも、イベントに出演する場合がある。だから、主催者側に飛行機代を出してもらえるようになるまでアーティストを育てるのが自分たちの仕事なのだと言っている。ただし、別の質問者に応えるかたちで山本氏は、アーティストを必ずしもメジャーで活躍するまでに有名にしたいわけではないと語る。それは、メジャーアーティストとして標準化してしまうのではなく、現地での彼らの活動を尊重し、できるだけそのままサポートしたい気持ちをもっているからである。その意味で、自らの活動を「慈善事業」と呼ぶのは間違いではないかもしれないと山本氏は述べるのだった。

この後もフロアを交えた議論は続き、その中ではポピュラー音楽に対する公的支援をめぐる問題、クラブカルチャーの特徴とフェス文化との結びつきに関する問題等が議論された。一連の議論を通じて、音楽フェスをめぐる論点が多様な広がりや深みをもつことが理解された。

最後に付け加えるなら、今後の展望についてフロアから質問された沖島氏、山本氏がともに、自分たちの活動をつうじて、人と人をつなぐ架け橋になりたいと語っていたことが印象深かった。それは、山本氏がいうように、よい音楽をそれと受け止めてくれる人に伝えたいという思いである。様々な現実的制約を乗り越えて、人と人／人と音楽との結びつきをつくりあげていく力の源泉がここにあるように思われた。

(報告 吹上裕樹：関西学院大学大学院研究員、岡田正樹：大阪市立大学大学院文学研究科博士後期課程)

会員のOUTPUT

広瀬 正浩

『戦後日本の聴覚文化：音楽・物語・身体』

(青弓社、2013年9月)

判型・ページ数：四六判・324ページ

定価：3,150円(税込)

ISBN: 978-4-7872-7340-6

斎藤 完

『映画で知る美空ひばりとその時代 ～銀幕の女王が伝える昭和の音楽文化』

(スタイルノート、2013年7月)

判型・ページ数：A5判・256ページ

定価：2,100円(税込)

ISBN：978-4-7998-0117-8

◆ information ◆

理事会・委員会活動報告

■ 理事会

2013年第3回理事会(持ち回り)

(10月2日議題送付/10月16日回答締切)

議題1 前回議事録案の承認

議題2 新入会員の承認

事務局より

1. 学会誌バックナンバー無料配布について

現在、JASPM 学会誌『ポピュラー音楽研究』Vol.1～Vol.11のバックナンバーは、そのすべて

の記事が、科学技術振興機構のオンラインサービス、J-STAGE におきまして無料で公開されています。

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jaspmj/1997/-char/ja/>)

そのため、事務局に所在する Vol. 11 までの冊子体のバックナンバーを、希望者の方に無料で配布しております（ただし送料はご負担いただきます）。

在庫については学会ウェブサイトの「刊行物」のコーナーに随時記載しておりますので、配布を希望される方（非学会員の方でも結構です）は事務局にお問い合わせください。また、ネット上で内容が全文公開されていない Vol. 12 以降のバックナンバーについては、引き続き通常の販売を行い、無料配布の対象とはいたしません。ご注意ください。

2. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちで JASPM の活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から 1000 字から 3000 字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

ニュースレター97号でお知らせいたしました通り、今年の全国大会より、個人研究発表については本人による報告概要をニュースレターに掲載することとし、個人研究発表についての（フロアの方からの）報告は、会員の自発的なニュースレターへの投稿により行われます。興味深い個人研究発表について、ぜひとも積極的な報告・批評をご投稿くださいますようお願いいた

します。

ニュースレターは86号（2010年11月発行）より学会ウェブサイト掲載のPDFで年3回（2月、5月、11月）の刊行、紙面で年1回（8月）の刊行となっております。住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行される号にのみ掲載され、インターネット上で公開されることはありません。PDFで発行されたニュースレターはJASPMウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています。

(URL: <http://www.jaspm.jp/newsletter.html>)

本年より、8月の紙媒体での発行号については、会員の動静に関する個人情報を削除したものを、他の号と同様にPDFにより掲載する予定です。

次号(99号)は2014年2月発行予定です。原稿締切は2014年1月20日とします。また次々号(100号)は2014年5月発行予定です。原稿締切は2014年4月20日とします。

2011年より、ニュースレター編集は事務局から広報担当理事の所轄へと移行しております。投稿原稿の送り先はJASPM 広報ニュースレター担当(n1@jaspm.jp)ですので、お間違えなきようご注意ください。ニュースレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

3. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局(jimu@jaspm.jp)まで郵便またはEメールでお知らせください。

現在、各種送付物などはヤマト運輸の「メール便」サービスを利用してお送りしております。このため、郵政公社に転送通知を出されていても、事務局にお届けがなければ住所不明扱いとなります。ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。

例会などのお知らせはEメールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

4. 国際ポピュラー音楽学会日本支部委員会規則 の改正について

前号、ニューズレター97号でお知らせいたしましたように、12月7日（土）に開催予定の日本ポピュラー音楽学会総会において、標題規則の改正に関する採決を行う予定です。詳細については、8月発行のニューズレター97号

（<http://www.jaspm.jp/wp-content/uploads/2013/09/NL97.pdf>）をご覧ください。

総会に出席できない会員の方は、大会実行委員会から送付されている委任状ハガキを返送くださいますようお願い申し上げます。

JASPM NEWSLETTER 第98号

(vol. 25 no.4)

2013年 11月 17日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会（JASPM）

会長 細川周平

理事 粟谷佳司・大和田俊之・久野陽一・
鈴木慎一郎・谷口文和・増田聡・南
田勝也・毛利嘉孝・輪島裕介

学会事務局：

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

大阪市立大学大学院文学研究科 増田聡研究室

jimu@jaspm.jp（事務一般）

nl@jaspm.jp（ニューズレター関係）

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：平石貴士